

黒を金じよ

永遠を聞け。少なくとも秘封倶楽部はそうしていた。

たとえばこの夜である。冥い街の一室に置かれた椅子。そこへ座る宇佐見蓮子は永遠を耳に当て、ここではないどこかで同様に過ごすマエリベリー・ハーンと会話をしていた。未だ出会わざる相棒と。幻想の名がひとつ挙げられるとそれについて娘たちは意見を言いあっている。たとえば怪鳥アツカである。

蓮子の居る場所は首都で流行っている奇妙な貸し部屋のひとつであり、結界を応用した窓と椅子の他には何もない個人空間だ。携帯端末の通信は遮断され、計算された通路の曲線や勾配のために夜から滑り落ちるようにして方向感覚が失われるため、入室した利用者は部屋以外の存在を

信じられなくなる仕組みだ。備え付けられた窓の外には地球上のあらゆる風景のどれか一つが映し出されるという。カーテンを閉じたままにしている蓮子には、それが仮想現実を使用した偽風景なのか現実の景況なのかを知るすべはない。そもそも現代では結界を利用すれば世界中のどこでも一室を構えることが可能ではあったため、窓の外で大樹の群体が小暗くひしめいていたり、青雲の高空で風と光が叫んでいたりといても格別の驚異ではなかったが、どれも今の蓮子には必要とされていなかったため捨て置かれた。いま彼女が賞味しているのは他愛のない会話だ。百年以上前に作られた手のひら大の円盤形記録媒体を指で回転させながら耳へ近づけ、目の前の机上に広げたノートへ堆積された腐刻写真と翳る文字を得意げに参照しているのだった。

だが窓の外は全て嘘である。この星で部屋と娘の他に存在するものは何もない。

幻想郷の夜空に新たなふたつの星が増えたことが発端だった。その名

は火星と冥妃星。かつて太陽系に存在するとされた仮説上の惑星であり、結局発見されることのなかった二つがこっそりと夜へ掲げられていた。いかなる瞳にも映らなかつた星は、それでも上天へ広がる繊細な星^{せいゆ}榆の枝葉を揺らす一滴として空へ影響を与え続け、妖怪たちが星巡りの異常に気づいた頃には混乱によって夜空は軋みをあげ始めており、のたうつ大地との交点を面白からぬ方法で急ぎ修正してやらねばならなかつた。だが後に残された問題こそが住人たちの頭を悩ませたのだ。なにしろ原因となった星が不可視であつたため、星廻の手入れをしようにもできかねた。手をこまねいている間にも夜空の均衡を二星は崩し続けるだろうし、星々の剪定を行わぬままでは枝どころか幹や根ごと天を腐らせることになり、結果として滅びる妖かしが出て来るかもしれない。といって疑わしいものの全てを除く手法も取られなかつた。膨大な手間を嫌つたものか、そもそも幻想郷が除かれた物の集まりであつたからかもしれない。

解決を図るべく或る一夜の野天で宴に見せかけ集まつた妖怪と神々は、

額を寄せて酒を喉に流し込みながら話し合い、この怪異について自分たちが武器にできるのは時間において他にないという意見の一致をみせた。すでに応急処置は済ませてあり、であれば悠長な手を打ち限界まで待つのが得策と結論付けられたのだ。秋風が果実を熟れさせるように。もしくは冬を思わせる滅びの足音を味わい深く楽しむための方便でもあったろう。中には喉元へ添えられた刃のきらめきを愛おしげに抱きとめる者もいるのだ。

——残された時は片手ですくい上げられるほど。すなわち一夜。

計算の得意な者が予測を告げると、物足りぬと言わんばかりの含み笑いが場にさざめく。夜の長さは変わるもの。日が沈み暁を迎えるまでの間、時間の長短において幻想たちは多少の融通をきかせることができる。一度の夢中で人は千年を見ることが可能なように。そして実に迂遠な、確実でありながら不穏な手段が採択された。秘封倶楽部を名乗る二人の少女が色素として選ばれたのだ。

他星の動きから予測された視認できぬ星の位置そのものは、砂漠の中から一粒の砂を選び出すに等しい精度で導き出される。とはいえ不可視は不可視。透けた砂を正確に細工することはできぬ。ならば染めてしまえばよいのだ。自らの知りうる色で。もっとも知りたる色で。幻想たちが最も知悉する色は人間の欲望であり、年若い少女たちのそれは特に鮮明で的確だった。

夢を通して幻想郷を訪れていた秘封倶楽部をどうやって妖怪たちが知り得たのかは、その顛末を同じく夢の中へ置き去りにしてしまったためか言葉として残されてはいない。しかし少なくとも居場所をつかんでいたのは間違いないようであり、就寝していた二人の影が一夜だけ切り取られ、持ち去られて夜空へ放たれた。見えぬ星らの遊ぶあたりへ影が撒かれると麵麩が麵麩種に促されるように一室とひとりが開いて色づき、夜の幻燈として光りはじめたのが未だ出会えぬ蓮子とメリーの通話空間だった。手を出せぬほど遠くの星間に途ができるとまでは考えていなか

った妖怪たちは、この余興を樂しみながら経過を眺めている。現実と記憶とが矛盾を起こさぬよう機織^{はたお}り装われた虚像の世界の中で、影の娘たちは夢を見ていた。

いつ円盤を見つけたのかはメリー自身すら覚えていない。かつて小さいころに存在した物置の暗闇から墓荒らしのようになしてまぎぐった末に取り出したものか、それとも首都で学生をやるようになってから靈感に導かれるまま訪れた店に置かれていた古物の中から選びだしたものか。いずれにせよ記憶はあざやかに切り混ぜられて渦巻き、夜の砂漠へ降りる露のごとく心もとない。円盤の記録層と表題塗装を兼ねる微細な化学合成部は大部分が剥げ落ちており、その中で蛭のようにへばり付いた題名を探ったのはメリーの気まぐれだった。

古びた知識の集積場所を比較的自由に探し回れる学生であったことも幸いしたのか、世界の情報網の隅に忘れ去られ過剩腐乱していた円盤の

詳細をメリーは見つけ出した。かつては音楽を提供していたらしい円盤には物語が付属していたらしく、そこに自らと同じ名前を持つ偶キヤラクター像を見つけた時でさえメリーの感情は動かなかったが、同じ能力を使役していたのは文字通り目を疑った。はじめて結界を視た時のごとく。偶然がほくそ笑み立ち去る姿に娘は魅入られたのだろう。

猖獗をきわめて茂る彼岸花の只中へ立つ時のような狂おしさをもつてメリーはまず事実を拒否し、そうした激しさから時間を経て解放されると今度は振り返って深く吟味に耽った。彼女は鷹揚に結論を下す。思い違いであろう。だがもしかしたならば、この物語は自分のことを記しているのかもしれないと。

ありえぬ。幼子がおとぎ話の主役になったと思ひ込むよりもなお荒唐無稽。そもそもメリーは魅知への憎しみにおどむ性質たちでもない。かような考えは古い衣を脱ぎ捨てるように人生の道端へ投げ出してしまふべきだと娘の脳は告げた。だが空気と世界の色に關して退屈を覚えていた娘

はこつそりと円いガラクタで遊ぶようになり、同時に円盤の姉妹たちにはこつそりながら記されていた物語も少しづつ収集していった。冒険と旅行が記された短い話をなぞりながら満月の夜になると円盤を弄びつつ、秘封倶楽部の物語へ思いを馳せてメリーは結界を視て回った。夜空を見上げながら答えるはずのない相棒へ座標をたずねながら円盤を月に重ねる。やがては現実には追いつかれこの遊びも飽きるだろうと、脳の片隅が言うのを無視して。

たとえば巨人ファンバである。娘たちは目に光をたたえて笑った。

貝のように円盤へ耳を当てる仕草を好んだ夜、世界の均衡が破れる音を蓮子は聞いてしまった。耳元へひとつの挨拶が遠慮がちに告げられたのだ。美しい立場の魔術師マジックによる言葉を。心臓と背骨が裏返しにほじくり返され、混乱と興奮の階段を駆けずり回りながら娘らは夢中になって

言葉をかわした。同じ立場の者が同じようにして昔の記憶媒体に魅せられ、それぞれのやり方で耽溺していたのだ。違いと言えば蓮子は夜空を見上げ、メリーは円盤の境界線を見ていたことくらいか。ふたりの通信は一夜だけにとどまらず、部屋が月光の毛氈もうせんに包まれる頃合いであればいつでも会話を再開することができた。禁止されるべき貴あてやかさを以つて二つは冥い街のどこかで他愛のない会話をあふれさせる。月の棒で撫ぜられる妖鳥に、地上のめくれをのぞく化猫。つるべのように落ちていく星の光が暁へ飲み込まれるとひとりとなり、再び二つとなるための時間を待ち焦がれた。お互いの住処が同じ国の同じ首都であるにも関わらず、いくら待ち合わせても決して二つが出会うことはなかったからだ。何人も知り得ぬ『次元』と言われがちな階段をひとつ違えて彼女たちは会話していたのだろうか。

だがそれらは全て嘘である。彼女たちは部屋から出たことなど無いのだ。

ふたりのやりとりは夜の隙間を歩むものたちに直接聞かれていたわけではない。距離や寸法の関係で精神の微細構造となった交信が、ワイルドハントのように動き回る様を観測されていただけである。ただ、その鼓動と夜景異端呪問歌は妖怪の注目を集めるには十分で、珍しいことも達は古代彫刻と同種の楽しみを帯びていた。往昔の神話に書いてある神の胤や鬼の子じみて孤独であり、声のつながる先は遠い国の一点である。まるで物語の新生だった。ギリシャ哲学の近代化が原子核を物質窮極の姿であるとする概念であったように。

たとえば闊歩するだいだらぼっちである。娘たちの唇から笑い声が漏れた。

そしてかわきやまない時間に飽いたふたりはついに冒険を初めたのだ。旧い記憶媒体へ付随した物語の少女たちのように十字軍の夜を飛び越え、

結界の陥穽を信じて疑わず見て回り、大地の果てもしくは内側へ向かった。ひとりぼっちずつで、声という花紐につながれた相棒と共に。蓮子は目的地を決めてメリーを誘い、そこにただの空間が広がるのを確認して夜空を視上げた。メリーは結界をその目で視て、時おり裂け目を見つけては遠巻きに眺めていた。

物語は物語。生身を噛む興奮に痴れた彼女たちは、同じ早さで現の焼きごてを当てられて擬似的な戯れから覚め、飽いた。秘封倶楽部は二人で行動していたのだ。満足できるはずもない不完全な模倣から黒臉を背けた少女たちは、理想を耳から遠ざけて見つめた。

そう。物語は物語。しかしすでに理想へと墮しており、手を伸ばすにはちようによい頃合だった。

どちらかの娘が言う。

——会いたいね。

どちらかの娘が答える。

——会いましょう。

あとは理想の和毛にこげを撫でれば事足りた。娘たちの間に横たわるのは空間。あるい時間。どちらにせよ声が聞えるのであれば無限に続く螺旋階段のうち一段ほどの差であつたろう。段差を飛び越えるために噂が収集された。使用されていくふたりの目はどんどん視えるようになっていき、まだ人間が幼かつた時代に信じられていた物語のようなふたりはついに道を見つけたのだつた。

例えば京丸である。邂逅へ向けての談笑と期待に満たされた部屋。窓の外はすべて嘘。それも嘘。

幻想郷のあやかし共は慌てた。麵麴種によって膨れすぎた星と星がつながろうとしている。星の位置をつかみきれないまま双方が癒着してしまつては制御どころではなく、いずれ本当に空をもぎ墜としてしまうだ

ろう。同時に予測を超えた欲望がどのような色を見せるのかは興味深くもあり、穢れた病衣のごとく焼き捨ててしまうのはためらわれた。

月華が光の硝子となつてあたりを濡らす丘の上、数多の目くぼせが交差する中で芝居気たつぷりに立ち上がった一柱が言った。空に二つの星がある。暗く閉じられたそれを開かんと我々が投げ入れたのは、少しばかり愉快な瞳を持つ少女たちの影である。いま少しあれらを封じ込め手の内で転がすために結界として空へ何を作るべきか。いや。何を描くべきか。

目玉のふたつ付いた帽子をくるりくると回し、集団の中心へ移動しながら一柱は歌い踊る。夜天へ閉じた瞳が二つ。酒の他には何がいる？ 頭をひねる音や答えを得た忍び笑いが妖怪たちに広がり、ついには声が四方から投げかけられる。目があるならば顔^{かんぼせ}が。首もはらわたも生き血も足りぬ！

応えるように尊大に笑ってから一柱の掌が空へ突き出される。自ら音

頭を取るのも当然であつたろう。これは眷属（もしくは化身）に巨人を持っていたのだから。それを久方ぶりに空へ解き放たんとする彼女へ宴の方々から少なからぬ助けが差し出され、様々な色を乗せたまじないが縞瑪瑙のようになつて夜空へ攪拌されていく。

こうして運命を手折つて編まれた虫籠へ瞳に死を容れた娘たちは収容された。その鼓動は須弥もしくは永遠に変換され、おびただしい疎密を臆面もなく全身へ血潮のごとく巡らせる。その黒白は乾もしくは坤となり、五月蠅^{さばえ}なす大地に横たわらず駆け続けた結果、陽光の黄金^{きん}を生み出す魔法が変容して顔を失つていく。意味が不明とされた。

Rは巨人の頭蓋の中に置かれている。

彼女は明滅する壁で囲われた部屋の中央で椅子に座っていた。ひとつの椅子と机と扉を除いて何もない部屋は、一定の周期で床ごと透明に移り変わると遠い白砂のような宇宙の星々をRに見せる。そこから読み取

れる座標や時間は存在しない。そうするうちに宇宙は消え去り他の光景が立ち現れる。巨人も夢を見るのだ。地上の黄昏や闇に沈みゆく灯がまばらに眼下へ浮かび、薄れ行く夕暮れと代わって夜が外套を広げた。灯の色や集まり方からして二十■世紀ではなく遙か昔の夜のようにであったが、空へ目を転じてみれば宵の明星に負けじと人工衛星の紅い光が昇つていく。このような夢の中では自らの居場所を巨人は定められないのだろう。無論Rの目に場所と時間は見えないままだ。

山々を踏みしだき、髪を星に梳かせて存在は征く。地面には踏み跡どころか影も残さず、人の形をしただけの巨大が世界を越えていく。

Rは立ち上がった。壁面へふたつの複雑な符号、二度と再現できぬような文様が躍って拡散する。追うように壁へ指を添わせるといかなる都市にも似ていない夕焼けのための国が垣間見え、一息のあいだに崩落した。あとに残るのは白亜にも似た無地の壁面である。透明ではない時に高い天井へうつすらと渦巻いている線から想像するならば、それは大木から

削り出された二枚の大板で作られている。蛋白石オパールのごとく鉱物質な曲線がただよう木目は複雑にして快く、雨に沈む都の輪郭を思い出させた。視線を下げた先にある扉は素晴らしく輝いている。縁には銀と金箔の細工が散りばめられており、昼夜のいずれも豊かな色で彩られた材質不明の扉。

異形の体内へ入り込んですぐ、探検のさなかでふたりは互いを見失った。それが何日前になるのかRは見当もつかず、以来こうして部屋の中で日々を過ごしている。娘の耳へ小さな音が忍び寄ってきた。窓の外にある宇宙の中でひととき小さな星の光よりも、なお細やかで聞き慣れた足音が。巨人は全く音をたてぬ。だからもうひとりの彷徨う音がこの部屋まで吸い上げられてきているのだとRは信じていた。

さて、世界にはもうひとつ奇妙な特徴がある。扉の向こう側へ行くと娘は意識が断たれるような眠りに落ちてしまい、しかも前後の記憶が消失するのだ。記憶がふつつり途切れる場所は不定であり、時の始めはい

つも部屋の椅子の上。夢遊病じみて寝ている間に探し■と出会っていないだろうかと考え、雑記帳と共に持ち込んでいた筆で顔にメッセーじを書いた日々もあったが今のところ効果は上がっていない。

Rは扉へ指を走らせる。その向こう側は燐光が壁にへばりついた暗黒の迷路だ。足音はどんどん近づき、やがて扉の前までやって来るはずだった。毎度のことなのだ。すっかり無口となつてしまったために萎びてしまった喉から掠れた声が絞り出される。呼ぶのは出会うはずだった相棒。眠りにつく前の習慣を終えると、Rは扉を開けて意識を手放した。

そして扉から一步踏み出したMは後ろ手で扉を閉めた。自らが眠っていたことを知りながら。巨人の体内へ取り残されて長くなるが整然としたこの不条理にMは慣れず、立ったまま覚醒する自分が■間ではなくなつていく錯覚にとらわれるのだった。最近の記憶はいつも扉の前から始まる。振り返って扉を開ければ暗い部屋の中にある椅子と机を認めるこ

とができるはずだったが、もし一步でも部屋の中へ踏み込めば彼女は眠ってしまうのだ。

扉から離れて淡く光る階段をMは下っていく。ゆったりと幅を取ってある通路がどこまでも続く巨人の内部は遠大であり、途中に岐路が幾つもあるため未だにMは道筋をおぼろげとしか把握できていない。まだ行き止まりへ出くわしたことが無いことから、通常の道ではないのかもしれないと疑いを深くしていた。左右はほぼ垂直になった鉾質の壁であり、そよ風すら流れていないのにどこで循環しているものか、快適な温度に保たれた空気は清潔なままだ。あたりは董色に淡く明滅し、時おり全てが透明になり外の風景を見下ろせることもあった。宇宙もしくは地上の夢。天井は先が見えぬほど高くにあり、壁の燐光では到底見渡せないほどの闇が垂れ下がってきている。いくら歩き続けても疲れや渴きが訪れない幻想は彼女にとって珍しいものであり、それなりに長い虜囚期間を経てもなお楽しんでいるところがあった。

そしてひとつの夜が来る。

Mは足を止めた。巨人の外側に広がる空間の大伽藍。そこで起きた変異を勘で悟ったか。壁へ手を当ててじっと透過を待つ娘にやがて外の光景が見えはじめ、すると夜に撒かれて降りしきる雪を目の当たりにしてMは息を呑んだ。雪は白い桜であり、夢の地上へ向かって舞い散る花びらは空のすべてに落ちていく。だが桜の木など一本たりとも娘は見つけ出すことができなかった。頭上には霞のように降ってくるものが斑に広がっているばかり。花々の源を探すべく頭蓋へ向かって娘は階段を駆け登り、この夜の正体を知るためだけに急いだ。

部屋の前で足を止めたMは再び世界の夜を見ようと扉へ背を向けてから、壁にびっしりと繁る燐光の斑へ指を沿わせた。そして世界が割れたのだ。正確にはMの左目の視界が粉々に砕け散り、頭蓋の部屋の内装が――背後にあるはずの光景が見えた。決して見ることもかなわなかったものを見せられて困惑し、その理由を探す最中に巨人は虚ろとなって俯瞰

図のすべて娘に見せた。はるか下方の雲へたなびき落ちる白い花の乱舞は、地平線のあたりだと星々と月の空隙を埋める白砂となっている。左目もまた同じ光景を見下ろしていた。そのうち視界が僅かに逸れ、それはどんどん大きくなってまるで違う方向まで動いたとき、娘はようやく思い至った。ここで自分以外に動ける者はいったい誰であつたろう。

Mは振り返つて扉を開いた。左目の視界は部屋の内側から扉の目前に立っている。開け放たれた扉の先に広がる光景は部屋と椅子と机であり、左目が写すのは開かれた扉と広がる壁。廊下。腐蝕図めいた董色の淡光群。期待した相棒の姿は見えず、Mは手を伸ばしたが掌は空を掴んだだけだった。左目の視界から相手も同じように目前をまさぐっているのだらうと推測できたとき、ここへ来てから初めて娘はためいきをついた。

それからの日時は試行錯誤に費やされた。ふたりは幸せだつたろう。自らの意思を伝えるため、もしくは相手の世界を汲み取るために生活が行われる。すべてが無駄と知れるまでにさほど長い時間は必要なく、知

りつつもあがく日々が速やかに過ぎ去った。忘れてはならない。巨人は星を見出すべく定められており、目的の星はふたつの瞳となっている。であれば瞳は決られるのが当然ではあるまいか？ 空となった酒瓶がどう抛^{なげう}たれようと胃の中へ収められた酒に変わりはないのだ。

最後の異変として用いられたのはまたもや視覚の破壊であつた。娘たちの両の眼へ不可解な映像が混ざりはじめたのだ。

知性体による造物。おそらくは都市である。

恒星による輝き。おそらくは空である。

色も形も想像だにせぬ構成をしており、それだけでは澎湃^{ほうはい}とわきあふれる熱夢を可視化した創作物のように思えた。映像は誰かの視界であり、『誰か』も含めて姿の映ることはなかったが、服の裾や手先など体の一部がはらはらと映ることはあつたのだ。新しい情報に飢えていた少女たちは『誰か』がどういった者であるのかを推察していく思考をたどり、最初は途切れがちで短かった映像が長く頻繁に、なにより鮮明になって

いくのと比例して意識をのめり込ませていった。彼女たちは気づいていただろうか？ 映像の訪れが蓮子とメリーのやりとりを彷彿とさせていたことを。用いられるたび強く鮮明に。もしくは段差を移り歩いて近づくように。わかつていたのであれば他にやりようもあったろう。

その映像が秘封倶楽部の視点そのものであることに気づいた頃には、もうふたりとも戻れないところまで心をとらわれていた。結界を暴く活動のために惜しむことなく知恵と行動をふるう蓮子とメリーの輝きは、墜ちる星のように強烈な印象と苦い吐息で娘たちの胸を満たしていく。物語ではなく実在する秘封倶楽部と彼女たちは違うのだ。本人たちの影であることが作用しているのか。あるいは無意識に自覚したものか。自覚。■間にとっては常に毒であるこの意識がふたりを傷つけていった。見知った部屋のゆりかごからはすでに遠く、あるかどうかともわからぬ物語の残滓を求めて彷徨した努力が自傷行為であったかのように感じられた。着ることの許されぬ色の衣を探し求めた愚か者のように。しんじつ

己に裏切られたふたりはかなわぬ夢を見ていたと悟った。

世界の果てにおける刈り取りが始まった。理性の莖に実った正気という名の稲穂が速やかに収穫されていく。娘たちの行動と発想に隠惨な影がまとわりつくようになり、精彩を欠いた推論が何もつかめずに立ち消えた。部屋の境界も緩んだのか、どちらが頭蓋に居てどちらが体内を動いているのかも曖昧になった。できることは無くなつたと絶望が甘やかな声で告げる。さあ、しかと見やれ。だが娘たちは顔を手で覆った。

かなわぬ夢が瞳に映り続けていたために己の瞳から逃れようと片方が走りはじめた。巨人の中をあてもなく、闇のひだの中で出口を見つけるためか、または充満する苦痛の螺旋を空間に反映させたかったのか疾走し続けた。その狂奔する視界を共有する片割れ、肉と骨と心の臓に埋められた倦怠の熱い顎あぎとがもたらす鈍い狼狽の只中で動かない方の娘は知った。声しか知らない相棒は風のひとつになっちゃったのだと。あまりに早く走っていくために全身から髪と同じ色の毛が伸びていき、いまや

一颯の光となつてゐる。待ち続ける方はあまりに長く座つたままだつたので、全身から睫まつげと同じ色の毛が滝のように広がり、一色の埴塙となつてしまつた。

一夜が千夜となつてしまつた中で、停滞と奔走を連続するふたつは渴望してゐた。それが何なのかは言葉にできないでゐたが、幻想郷の妖怪たちであればそれは人間の欲望のどれか、もしくは混合物だと表現できたかもしれない。今や地上に宴を張る幻想たちの瞳には見えざる星がはつきりとその輝きを露わにしており、大氣を撃ち砕く音を放ちながら夜空を滑り落ちてゐる。むきだしの欲望によつて淬にらぐ流星の内側で、捻くれたふたりはとうに娘ではなくなつてゐた。その中で何が起きているのかを知覚しはじめた幻想たちは楽しみ、欲望が混乱を窮めて振れる様を見て笑つた。ねじれ収束していく巨人がほつれ、体の末端から黒い粒を撒き散らす光がゆらめき弾け、最後には瞳だけがごうごうと炎と噴いて錐揉みしながら妖怪たちの宴会の最中へ墜落した。

当然巻き上がるはずの土砂や岩石や音はなく、いつの間に移動したのか一匹の妖怪が無造作に差し伸べた手の上へ星が二つ乗っていた。そこにあるのは夜空の黒そのものであり、墜落して地上の空とも溶け混ざってしまった娘たちの感情があつた。この輝きに喝采を宴の参加者が与えると、星は再び天へと投げ戻される。異分子を滅ぼすことが目的ではないのだ。認識できるのであれば星図の一葉として新しい彩りを与えてくれる暗黒星たちを、笑いながら地上の者たちは見送った。

宴も終わろうとする頃、巨人を呼んだ神様に同伴していた現人神が遠慮がちに聞く。外の世界から借りてきた少女たちの影も空へ返してしまつたのではないか？ 返事のかわりに硝子よりも透明な酒の入った猪口がどこからか差し出された。不安がる子供をあやしつける親にも似て。

ある朝に目覚めると秘封倶楽部の二人は影を失っていた。急ごしらえの嘘で休暇をでっち上げると、間髪入れぬ活動を通じて失せ物へ通じる

結界の境目を見つけ、即座に少女たちは飛び込んだ。その先に広がっていた夢（もしくは現）は鉱質の壁と快適な空気で作られており、あまたの階段は董色で淡く明滅し、時おり全てが透明になり外の風景を見下ろせることもあった。宇宙の見る夢がこうであったかもしれない。なにしろ飛び込んだのは何処^{どこ}ぞの空に浮かぶ星座のひとつであったのだから。星影の世界を目指して境界を通り抜けてきた秘封倶楽部が薄明かりの迷路を抜けた先に待っていた扉を開けると、はつきりした光に満ちている大きな部屋が広がっていた。

床には海と見間違ふほどの毛がたゆたっており、名状しがたい光を受けてきらきらと輝いている。金色と黒色の斑。もしくは混在。連続線で沸きたつ彩海の中央あたりに巨大な四つ足の獣が座っており、秘封倶楽部を見つけるとゆっくり身体を向けてきた。こすれる音ひとつなく床全体の毛泥が弧を描いて流れる上を無造作に、毛の源である獣が一步をすすめる。身長より倍も高かろうかという座高に圧された少女たちが後ろ

へ身を引くと、もう一步を獣が進む。長い時間のあいだ言葉にできぬ言葉を抱いたまま待っていた獣は元々ふたつだった。円盤記録媒体の夢を見ていた影と影である。

忘れられた火王星と冥妃星を手中に収めたあと、影の借り賃として秘封倶楽部へ一夜の冒険を手渡すことに幻想郷の妖怪たちは決めたのだった。喉元へ刃をあてる程度に恐怖の愉悅が楽しめる夢を餞とするため、少女の影に呵責のない絶望を喰らわせ化物へ鑄直し報いさせるべく手を打った。この残酷さに食い散らかされた獣は知っている。今夜をもって自らが少女たちの足元へと戻り、しかも元が影であるために彼女たちの魂へ毛筋ほどの影響も与えることはないのだと。ひとつがふたつであった頃の記憶——円盤と言葉だけで夜を越えていた思い出でさえも完全な忘却に投げ込まれるのだと。地上のあらゆるものから遠い声で獣は哭いた。こんなことになるならば秘封倶楽部と出会いたくなどなかったし、それでも二人を追わねばならぬからだ。

背を向けて逃げ出した秘封倶楽部へ語りかける言葉を獣は持っていない。これより獣に追われる少女たちは恐怖によって全身の骨をひねくらせ、夢から覚めたあとで悲鳴を述懐して笑うのだろう。地平線の向こう側を目指して落ちる月のようにして部屋を出た獣が、言葉と幻想の境界線上で咲く感情をとどろかせて吼えた。冥い街角の風だまりで廻る月と星のような音。

その意味するところは永遠である。